言語研究センター共同研究

「言語の普遍性と個別性」

岩 畑 貴 弘

本共同研究グループが言語研究センターに登録してから本年度で7年目を迎えた（ただし研究会としての活動の始まりはさらに数年遡る）。今年度も引き続き、研究報告会ならびに外部から講師を招いてのワークショップ（予定）を開き、それぞれの研究テーマに関連して活発な議論を繰り広げ、精力的な会をもった。以下が今年度開催した研究報告会の概要である。

本年度第1回研究報告会は9月14日(木)に開催され、本学に新たに赴任した言語学を専門とする教員に講演してもらった。1人目は国際文化交流学科の永原歩氏で、タイトルは「日本語ガ格の対象性をめぐる問題 ～朝鮮語の格助詞gaとの対照研究から～」。日本語のガ格と朝鮮語の格助詞gaの用法を対照しながら、日本語のガ格の対象性について考察された。2人目はスペイン語学科の菊田和佳子氏で、タイトルは「不定詞に対する無強勢代名詞の位置の変遷について」。中世から黄金世紀にかけてのスペイン語における不定詞と無強勢代名詞の位置関係についての実例を紹介し、なぜ現代に至るまでにある形式は用いられなくなり、ある形式は残ったのか、無強勢代名詞の配置のルールに変化をもたらした要因について考察した。3人目は経営学部の堀田隆一氏で、タイトルは「英語の複数形はなぜ -s か」。現代英語における複数形の -s が英語史の中で、どのように一般化していったのか、そしてなぜ一般化していったのかについて研究した成果について報告された。

第2回研究報告会は、10月28日（土）に開催された。1人目は本学国際文化交流学科の岩畑貴弘氏で、タイトルは「日本語の終助詞ネの考察」。発表では数多くの用例を挙げつつ、これまで言及されてこなかったネの振る舞いを見ながら考察した。情報の「共有」「同一性」をキーワードに、しかしその適用を今までとは少し変えることにより、かなりの用例が説明されることが示された。2人目は、本学英語英文学科の武内道子氏で、タイトルは「二つの手続きの記号化「ぜんぜん…ない」と「まったく…ない」はどう違うか」。日本語の同義的副詞として考えられている「ぜんぜん」と「まったく」が手続き的意味論の立場（Wilson &Sperber 1993；Blakemore 1986；1992；2002）から議論された。両者は共通してひとつの手続きを記号化していること、および追加的にもうひとつの手続きを「ぜんぜん」が記号化しており、そのレベルで二つの副詞は区別されるということが主張された。

本稿執筆時にはまだ開催予定であるが、3月に外部より2人の統語論研究者を招いて、ワークショップを開催する。黒沢晶子氏（山形大学留学生センター、ロンドン大学Ph.D.）には日本語の名詞修飾節に関して、中島尚樹氏（マンチェスター大学Ph.D.）には日本語の補助動詞のテアルについての報告をしてもらう予定である。